

【原 著】

道徳教科化に向けた今後の新しい教師教育と学校教育の  
在り方に関する考察  
—総合単元的な道徳授業カリキュラムから考える真の道徳教育の検証—

作田 澄泰 中山 芳一

Consideration about the State of Future's New Teacher Education and Scholastic One for Morality Subject-ization  
—Inspection of the True Moral Education Considered from an Overall Unit-like Morality Class Curriculum—

Kiyohiro SAKUDA, Yoshikazu NAKAYAMA

2016

岡山大学教師教育開発センター紀要 第6号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education  
and Development, Okayama University, Vol.6, March 2016

原 著

# 道徳教科化に向けた今後の新しい教師教育と学校教育の 在り方に関する考察

—総合単元的な道徳授業カリキュラムから考える真の道徳教育の検証—

作田 澄泰<sup>※1</sup> 中山 芳一<sup>※2</sup>

文部科学省が実施する道徳教科化に向け、今日の学校教育において、道徳教育が必要とされている理由と今後の在り方について検討した。その際に、これまでに実施されてきた総合単元的な道徳教育による「学校教育活動全体として」の視点が強化された学校教育の在り方に加え、さらなる地域、家庭等と連携した綿密な道徳教育の在り方を必要とする。

本研究では、これらを踏まえた図式化をもとに、評価方法等の道徳教科化における効果と課題について考察分析した。その結果、道徳教科化により、道徳への意識が強調され、各個人への意識付けである道徳的価値意識が高まりやすくなることが示唆された。また、学校教育における自然・空間・人間環境づくりの重要性和「善く生きる」ための道徳教育に向けた教師教育の在り方について明らかにした。

キーワード：道徳の評価方法、道徳教科化による効果、学校教育の環境設定、総合単元的な道徳授業カリキュラム

※1 作田澄泰（早稲田大学教師教育研究所）

※2 中山芳一（岡山大学キャリア開発センター）

## I はじめに

近年、低年齢化による倫理観、道徳観の間われる諸問題が後を絶たない。文部科学省（2012）の問題行動調査結果によると、全国の小中高校などによる把握いじめ認知件数は、前年度の2.8倍と198,108件であり、1985年の調査以降最多となっている。この年を境に減少傾向にはあるものの、文部科学省（2013）の問題行動調査結果では、185,860件を認知しており、依然として高い数値を示している。また、小・中学校での同年度不登校児童生徒数は119,617人（前年度112,689人）、高等学校での不登校生徒数は55,657人（前年度57,664人）を認知している。<sup>(1)</sup> こうした課題を解決していくためには、もはや今日の道徳教育では対応することが困難な現状が考えられる。以上の問題点を踏まえ、政府（2015）によると、道徳教育の充実を力を入れ、道徳を教科化することとしており、いじめ等の諸問題減少に期待できるとしている。なお、作田はこうした道徳教科化を行うことで次の効果が期待できるものと示唆する。

① 道徳性発達を記述評価することで、個々の発達度が明確となり、多面的な道徳性を培うことが望

まれる。

② 教師をはじめとする学校側の道徳への授業意識の高まり。

③ 地域・保護者への道徳教育の意識改革。

以上の3点の利点が考えられるものの、道徳を教科化することで、指導者による「価値の教え込み」となることが懸念されている。また、道徳性を評価化することで、指導者、評価者による意図的な人格形成を行っていくのでは、自らつくりあげた道徳性ではなく、誘導による価値付けとなり、本来の道徳的価値とは大きく変わってくる。こうした側面から考えても、道徳教科化に向けた新たな取り組みが必要である。

一方、道徳教育の充実に関する懇談会（2013）による「道徳教育充実のための改善策について－新たな枠組みによる教科化を中心に－」と題して今後の道徳教育の在り方について次のように示されている。

◇ 道徳の時間が形骸化しているのは、教科でないからである。戦後、道徳教育に関する改善の方針は出尽くしており、それでも活性化させるためには枠組みを変えるしかない。

- ◇ 道徳を教科化という場合には、算数・数学や国語とは違って、もう少し緩やかな意味で使われているのではないか。緩やかな形にしながらも、各学校において指導が確実に行われるようにすることとの兼ね合いを検討すべき。
- ◇ 道徳という領域が持っている特質をもう一度確認して、その必要性を前面に出しながら、新しい枠組みの道徳教育を、どういう形でカリキュラムの中に編成していくのかという議論が必要。
- ◇ 「新しい枠組み」による教科化に当たっても、その教科を「道徳教育の要」にしつつ、基本的には学校教育全体で道徳を行うという方針で良い。その意味で、他の教科と横並びでない「特別教科」としての枠組みになるのではないか。
- ◇ 道徳は教科でないために、大学においても専門家が育たず、理論が構築されていない。教科になれば、目的と内容と方法を体系化しなくてはならなくなる。
- ◇ 道徳を教科した場合に私学の「宗教」をどう扱うかについても検討が必要。

#### ＜検討の視点（案）＞

- 道徳の特性に照らし、その充実を図るためには、教育課程にどのように位置付けることが適当か。
- ・ 道徳教育の特性（学習指導要領において指導すべき道徳教育の内容が体系的に示されていること、道徳的価値に関する知識・理解だけでなく、道徳的心情、判断力、実践意欲と態度など全人格にかかわる道徳性の育成が求められていること、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うこととされていることなど）に照らし、教育課程にどのように位置付けることが適当か。
- 道徳教育の充実に向け、これまで本懇談会で検討してきた以下のような改善の方向を実現する上で、道徳を教育課程にどのように位置付けることが適当か。

#### （改善の方向の例）

- ・ 目標・内容をより明確化・具体化する。
- ・ 指導方法については、児童生徒の発達段階をより重視するとともに、実践を伴う技法的な指導も積極的に取り入れる。「道徳の時間」と他の教科等との連携を強化する。
- ・ 一般の教科のような数値による評価はしない。

- ・ 指導要録において、児童生徒の意欲や可能性を引き出すような記述による評価を行ったり、指導要録の「行動の記録」の評価を活用したりする方向で検討する。
- ・ 「道徳の時間」の指導は、引き続き学級担任の教師が行うことを原則とする。
- ・ 大学の教員養成課程について、履修内容の充実に加え、制度的に履修単位数の見直しをする方向で検討する。

○ 道徳を「新たな枠組みによる教科化」する場合、その具体的な在り方についてどのように考えるか。「道徳の時間」を「教科」とするか、あるいは新たに「特別の教科 道徳（仮）」を創設し、「特別の教科 道徳（仮）」とするか。

○ 私立の小中学校については、引き続き「宗教」をもって道徳に代えることができるとする方向で良いか。<sup>(2)</sup>

以上の側面から考えても、道徳教育を強化させていくことは必要不可欠であり、特に他教科との関連性における道徳教育の充実が求められる。

## Ⅱ 研究の目的と設定理由

倫理観をもった道徳的な生き方のできる児童生徒をはじめ、将来において高い道徳性をもった人間育成のための教育普及を目指すことを目的とする。

さらには、目まぐるしく変化する社会に対応できる、高い道徳観をもつことのできる社会人に向けた学校教育の在り方を再検討していく必要がある。近年では、親離れや自立できない大人も多く目立つようになり、自分自身で善悪の判断をすることができない大人たちが育っていることが問題である。こうした問題点を踏まえ、これまでも荒木（2004）、植木（2014）らのdilemma、価値葛藤等により、道徳的判断力を培う研究が成され、学校教育においても実践・研究が取り組まれてきた。しかし、依然として学校・家庭におけるいじめをはじめとする諸問題が後を絶たない。なお、大森（2015）はメルロー＝ポンティによると、「心理的に硬い人にかけているのは、いろいろな存在者に直面した場合に陥らざるをえない諸矛盾を真正面から見据える能力である」<sup>(3)</sup>点について示している。こうした報告を踏まえ、さらに矛盾を見据えることのできる道徳的判断力の深化と学校教育活動全体としての道徳教育の必要性が求められる。しかし、これまでの学校教育の取り組みでは、各教科としての関連性を考慮した

道徳教育としては希薄化しており、学校教育活動全体としての道徳教育が行えているとは言いがたい。渡邊、盛（2000）らの報告によると、数年前から関わり合いを中心とした総合単元的な道徳教育研究が実施され、道徳性を向上させる効果が成されてきている。しかし、作田が勤務経験してきた道徳教育を想起すると、教師によっては、特設道徳の時間から他の教科を意識することが難しく、特設道徳の時間のみに頼っている現実もあった。以上の課題を踏まえ、学校教育活動全体として構成する総合単元的な道徳授業カリキュラムを根底から見直し、教科化に向けた評価の在り方について検討していく必要がある。そして、自らの力で判断でき、自分の力で善く生きるとともに、社会の一員としてたくましく生き抜いていくことのできる人間を目指すことが重要である。そのためには、学校教育全体としての道徳授業カリキュラムを根底から見直し、児童生徒たちの心に善として大きく影響する教育が必要であると考える。

### Ⅲ 研究の方法

道徳教育の主旨である「学校教育活動全体を通じて行うこと」をもとに、道徳性を高める総合単元的な道徳カリキュラムの在り方について考察した。また、道徳教科化に向けた利点と課題に向けて示唆すると共に、道徳教科化の意義について、今後の学校教育の在り方を指摘した。さらに、道徳の評価方法について他の教科と関連付けながら、児童生徒の道徳発達が明確に分かるための方法を検討した。

### Ⅳ 考察

#### 1 総合単元的な道徳カリキュラムづくりにおける道徳教科の在り方

道徳教育は、学校教育活動全体を通じて行うものとされており、道徳教育の目標に基づいて、各教科及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、「総合単元的な道徳」道徳の内容項目 1. 自分自身 2. 他人 3. 自然や崇高なもの 4. 集団や社会という、児童生徒が道徳性を発展させる関わりを重視し、これら4つの視点で再構成、重点化が図られ、その精神が各教科の内容改善の中に基本として生かされている。

各教科等における道徳教育は、各教科等の固有の目標に従って行われる。そして、その中に道徳的価値の内面的自覚を十分に図れる学習内容が必ずある。

その部分が明確に押さえられているときに、自らの生き方と関わらせて、児童生徒達が各教科の学習を主体的に展開してくれるはずである。例えば、社会科の学習の中に「働く人々」という単元があるとすると、そこでは、身近に働いている人々について調べることを通して、社会の仕組みや人々と社会との関わりを理解する。そして、さらに学習を深めるためには、自分も社会の一員として存在するという、より主体的な捉え方が必要となる。つまり、働く人々の努力や工夫、社会の仕組みを理解するには、根底に人間理解がなければならない。また、働くことについて、道徳的価値としての自覚が高まれば、自分も社会を構成する一員であるという意識から社会との関わりを主体的に考えることができる。自分も働く社会の一員だということが自覚できないと、学習は主体的にはならない。したがって、本来それらの学習は、社会科の「働く人々」という単元の中で行われるはずである。

いずれかのどの教科をとってみても、その教科の中に道徳的要素が含まれている。それは、各教科だけではなく、特別活動及びその他の活動、体験からも道徳性を養うことができる。また、逆に特設道徳だけの時間では到底、道徳性を培っていくことは不可能である。だから今、教科・特別活動・総合的な学習の時間と関連づけて行う新たな道徳教育が展開されなければならない。その中で、今までに知らなかった新しい価値を見つけ出すことになる。ここで、筆者が考察する総合単元的な道徳教育を行っていく上での利点について述べてみる。

- ・他の教科において、体験的・作業的活動を通じて自分自身を見つめ直すきっかけとなる。
- ・特設道徳の際に、自己を見つめ直すだけでなく、価値を深めていくことができる系統的な道徳カリキュラムを作成することができる。
- ・各教科や特別活動、総合的な学習の時間を想起するため、本時で検討する主題の価値について深めやすい。
- ・自分自身の学校生活での教科学習を振り返るため、実生活と結びつけやすい。→道徳的実践力へ

例えば、小学校低学年における生活科を例に見てみると、「自立」を目標に様々学校探検や町探検などの体験学習を行う。こうした体験活動の中で、様々なことを学習していくこととなる。多くの人と触れ合うことで、今までに知らなかった交通ルールや公



園などでの遊具の扱い方、遊び方のルールなどを学ぶこととなる。また、秋などに公園に行き、季節による変化の様子を見つけ出したりするなど多くの学習が考えられる。また、ウサギや植物などを飼育栽培することで、「自分もウサギのようにたくさん食べてがんばろう。」などのように自立の精神を抱くようになってくる。時には動植物の死などに直面し、改めて生命の尊さと大切さを実感するようになる。こうした、教科の中で学習したことを想起させ、改めて自分自身を振り返るきっかけとする必要がある。何故ならば、これから生きていくための力、すなわち道徳性が必要となるためである。つまり、道徳的実践力を育てていくためには、総合単元的に道徳教育を行う必要があると考えられる。そのためには、系統的なカリキュラムづくりと特設道徳の時間の授業のあり方による綿密な分析が求められる。<sup>(4)</sup>

## 2 各教科、学校教育活動との関連性

ここで、各教科、学校教育活動との関連をみてみると、概ね次のようなことが道徳性として含まれると思われる。

- ・国語・・・物語や説明文などの場面の情景を想像したり、主人公の考えていることや作者、筆者の気持ちに共感したりすることで、人の気持ちや思いを考えていく心情や判断力を培っていくことができる。また、文章や手紙を書くことによって言葉では言えない自分の思いを人に伝えたり、人の思いを感じ取ったりすることができる。
- ・算数、数学・・・文章題や計算法則・面積などを求める問題解決学習などを通じて、自分自身で解決していく力や多面的な見方・考え方を培っていくことができる。こうした学習の中から、より良い解決方法を見出すことができ、道徳的な判断力につながる。また、実験や体験活動を通じて今までに知らなかった自然の原理に驚きを感じたり、友達と協力する中で人の良さに気付いたりすることができる。
- ・社会・・・身近な地理や環境について考えることにより、自然の素晴らしさや環境の大切さを知ることができる。また、歴史学習を通じて、かつての先人の働きから、「苦勞や工夫」を知ることができ、「今日の自分があるのは祖先があるから。」といったように今の自分自身の生命の大切さについても考えることができる。そ

して、日本や世界の文化に触れ、伝統の大切さを感じ取ることができる。また、社会の機能を学習することにより、ただ単に社会システムを学習するだけでなく、勤勞の大切さや人の思いにも共感することができる。

- ・理科・・・動植物を観察したり、触れ合ったりする中で、体の仕組みや生育など今までに知らなかった生命の神秘を知り、生命尊重の心を感じ取ることができる。多くの科学の実験や土地のつくられ方を観察して、科学の素晴らしさや自然原理の雄大さを感じ取ることができる。
- ・生活・・・公園や地域を歩き、今までに知らなかった自然や人、建物と触れ合うことで驚きや感動を得ることができる。動植物と関わっていくことで、自分も「ウサギのようにがんばって生きよう。」などと、生きる希望やあるいは、動植物からの生命尊重の心も芽ばえると思われる。また、落ち葉や実・花などから季節の変化を感じ取ることにより、自然を大切にすることを育成し、それらを使った物作りなどを通じて自然文化の大切さを感じ取ることができる。
- ・音楽・・・様々な曲を聞いたり、自分で演奏したりして、曲想の雄大さや素晴らしさ、声の美しさなどの共感し、感動する心を育てることができる。
- ・保健体育・・・実際に体を動かし、ともに協力して体を動かしたりすることで、助け合うことの大切さや体づくりの大切さを考えていくことができる。保健領域では、基本的習慣・喫煙・飲酒・薬物乱用等を学習し、健康の大切さを学び、生命の大切さを考えていくことができる。
- ・技術家庭・・・様々な物の作り方、家庭での過ごし方、家族のあり方・役割などを学習し、家族の大切さや物を作る喜びを共感することができる。また、人の技能の良さに気付き、他者の素晴らしさを感じ取ることができる。
- ・美術・・・絵を描くことで、自然の素晴らしさや描いていくことの喜びを感じ取ることができる。また、鑑賞を通じて作者の思いや良さに気付き、絵の美しさを感じ取ることができる。
- ・特別活動・・・委員会、クラブ、児童・生徒会活動や学級係活動、当番などを通じて、役割・責任感だけでなく、友達との助け合いの心と友達の良さに気付くことができる。また、協力したことが達成感にもつながる。

- ・学校行事・・・運動会、学習発表会、合宿・修学旅行などの宿泊的行事、遠足、社会見学等を通じて、集団での助け合いと励まし合いなどの心を培うことができ、人の良さに改めて気付いたり、優しさに触れたりすることができる。
- ・総合的な学習の時間・・・テーマに向かって、友達と協力し、様々な手段を使って課題を解決していく中で、自力解決の力だけでなく、協力することや友達の良さに触れることができる。
- ・道徳・・・今までの自分を振り返り、目標に向かって、自己を見つめ直すことができる。学校教育活動全体の要である。

(5)

ここに挙げたものは、一般的なものであり、細かい点ではまだ多くの点が考えられる。しかし、概ねどの教科、教育活動でも言えることは、発表・説明を児童生徒自らが行ったり、活動したりすることで今までに気付かなかった人の良さを感じ取ることができるといった点である。そして、相談活動やインタビューなどのコミュニケーション活動の中から、人の意見を聞いて自分で判断していく力も培うことができるものと思われる。また、様々な体験活動の中から、今日失われつつあると懸念されている「感性」を豊かにすることができるのである。つまり、こうした学校教育活動全体を通じて、様々な道徳性を身に付けていくことができると思われる。そして、このような要素をそれぞれが潜在的に包括していると言えるのではないだろうか。つまり、道徳性を特設道徳の授業の中で改めて振り返ることで、新たな自分や友達の価値を見出すことができるかも知れない。そのためには、普段の学校教育活動を常に意識し、道徳性を感じ取りながら進めていくことが必要になる。かつてはこうした意識は必要なかったが、目まぐるしい社会変化の中において、学校教育だけでは心を育成する機能が衰退してきているのである。だから、より一層の道徳教育を学校教育活動全体を通じて行っていく必要がある。ゆえに、総合単元的な道徳学習のカリキュラムづくりが絶対不可欠となることは言うまでもない。

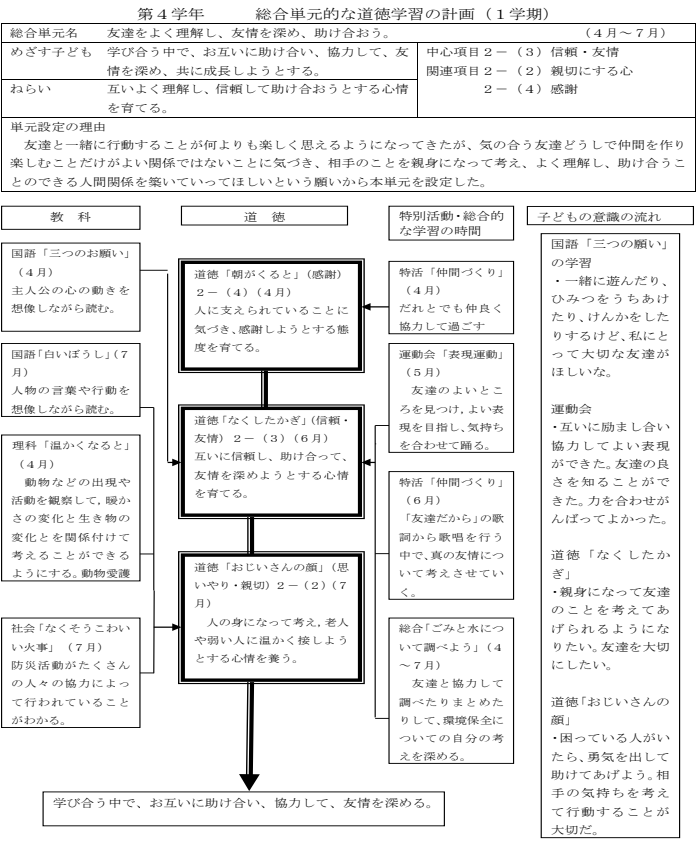
### 3 総合単元的な道徳授業カリキュラムからの構造分析と評価方法

下記に示す計画は、筆者のかつての勤務校での学期ごとによる総合単元的な道徳学習を図式化し、1学期間での道徳教育の目標・評価につなげるカリキュラムづくりである。

学級実態に合わせ、各教科、特別活動、総合的な学習の時間等と綿密に関連付けながら、総合単元的に評価を行っていくのである。例えば、1学期間において評価すべき教科において、顕著な点を取り上げ、「何がどのように、道徳的に成長できたのか」について記述で評価する。記述評価については、文部科学省も述べているが、学校教育活動全体として捉えて考えると、各教科との関連性は欠かすことのできない点となる。

また、下記の図式化においては、「めざす子ども」「ねらい」「中心項目、関連項目」が挙げられているが、道徳教科の特質上、決して指導者の教え込みや誘導となってはならない。これらについては、あくまでも目標であり、絶対的な1学期間での結果を求めるものであってはならない。しかし、授業者である以上、理想となるべき学級児童生徒の姿をえがい

図1 相互単元的な道徳学習構想図



(4)

ておくことは絶対不可欠である。何故ならば、目標なくして児童生徒の発達段階の水準を知ることができないだけでなく、学級担任として、どのような学級づくりを行えばよいのか不透明になるためである。道徳教育は、まさに学級づくりには欠かすことのできない領域の「善く生きる人間育成」のための教科である。ゆえに、道徳教科として、絶対に価値の教え込みとなってはならない。例えば、図1における1学期間での道徳カリキュラムの場合、目標に際してどの程度進捗できたかについて評価することが必要である。言わば、長期的なスパンにおいて、道徳性がどのように発達したかについて記述評価し、児童生徒達の道徳性向上と将来像を見据えた評価となることが必要である。

ソクラテスが「徳は教えられるか」と説いたように、道徳的価値を教師が教え込むことは到底できない。それは言うまでもなく、各々に価値観は千差万別であり、大枠には方向性は同じであっても、個々には道徳的価値が異なっていくためである。このことは、同じ人間がこの世にはいないことと同様に、道徳的な見方・考え方も個々に異なることは当然のことと言える。つまり、こうした個々に異なった価値があることから、より善い方向に自分自身の人世が導かれる教科であることが理想的である。ゆえに、評価の方法としては、文部科学省の提唱している、記述式の評価が妥当ではあるが、これに追記して、学期、年間等におけるスパンで培われた道徳性を各々に即した発達段階として評価することが望ましいと考える。こうした評価については、「何が、どの場面で、どのように関連して、どのようになった」等の心の変容を大きく表した内容の記述方法が妥当である。また、児童生徒に至っては、資料の登場人物やクラスの友達や教員の考えを「どんな思いでいたのだろうか。」「あの子の意見はどういう考えに基づくんだろう。」と懸命に理解しようとする。そして、さらに自分の考えの変化に目を向け、新たに見えてきた自分を見つめる。これらはまさに、他者評価や自己評価である。つまり、道徳教育や道徳の時間において、評価は大切な活動なのである。<sup>(6)</sup> このような自他の評価において、教師が客観的に評価するものとは大きく違い、各々における確実な道徳的発達段階を示唆する評価となり得る。教師の客観的評価の場合、児童生徒達に「こうなってほしい」という言わば、教師の児童生徒に対する願いが強くなることが想定され、こうした評価においては、確実な

ものとは言い難い。

以上の点を踏まえ、評価の在り方については、客観性と確実性のあるものでなければ妥当であるとは言えない。あくまでも評価に拘る理由として、児童生徒の道徳性発達度を確実に知ること、今後の道徳授業、或は学校教育活動全体としての在り方を再分析することができるのである。こうした、確実な評価を行うことは、児童生徒達の道徳的発達をより善い方向に導くための重要な視点と言える。

次に評価の視点として、各教科、領域、文化等との関連に際した評価の在り方について示しておく。道徳教育は学校教育をはじめとする全ての環境下においてもたらされるものであって、一部の分野のみで構成されるものではない。つまり、こうした全体像を考えた上での学校教育における道徳教育を行う必要がある。そして、これらの領域の中において、各々の児童生徒の成長できた点について、道徳性の向上に関連付けながら評価すべきであると思われる。具体的な方法として、図2に示す方法を提示する。

各学期間において、顕著に進捗した道徳性について示し、どの領域との関連があったかについて明確に示すものとする。記述においては、「どの場面で、どのように、どのような心を培うことができたのか」について明確に示し、児童生徒の道徳性について、進捗できた善い箇所を記述するようにする。各学期ごとの道徳性発達の評価として、具体的かつ顕著なものについて記入する。児童生徒のマイナス面ではなく、少しでも向上した点について記入するようにする。こうして、学期ごとの期間の中で培われ、向上した道徳性が学年の年度末として、どのように成長できたかについて記入する。このように、学期評価、学年評価、各学年ごとの評価として、学年が上がるにつれ、どのような道徳性がどれだけ変容していくのか、道徳性の発達だけでなく、児童生徒の成長した姿について把握することができる。これとは逆に、どのような支援が対象とする児童生徒に必要であり、道徳性を培っていくことが求められるのか、今後の教師の道徳教育に役立てることができる。(道徳的支援と評価の一体化による) あくまでも、児童生徒たちが思慮深く考え、自己を見つめ、判断力と心情を向上させていくことが必要である。そのため、これまでに述べた道徳教科化に向けた評価の在り方により、児童生徒たちがどのように育っていくかが重要である。

また、学年が上がるごとにファイリング等により、



道徳性の変容に関する成長をポートフォリオ的な方法として記録し次の学年に申し送ることで、当事者である児童生徒に必要な道徳性を知ることができる。そして、教師が児童生徒の道徳性を綿密に分析し把握することで、児童生徒への必要な道徳教育、或は学級経営を明らかにすることができる。しかし、教師は価値の誘導となってはならず、こうした評価から分かることをもとに見えてくるものを確実に受け止めて臨むことが求められる。

図2 道徳教科化に向けた評価方法例

(1 学期)
道徳性：「(例)生命を大切にすること、国際協力」
関連領域：「(例)保健体育、理科、特別活動(児童会活動を通じての国際協力募金)」
児童会活動における国際募金を進んで行い、自分たちだけでなく、世界の人々の生命を尊重し、互いに助け合うことのできる心を培うことができた。なお、理科の教科を中心に植物、昆虫等を積極的に学級で育て、他の児童の模範となり、命の大切さを皆に伝えていた。 ※ (1 学期間での進捗状況により、語尾を「培おうとしつつある。」等の記述で表記する。)
(2 学期)
道徳性：
関連領域：
(3 学期)
道徳性：
関連領域：
(学年)
道徳性：
関連領域：

#### 4 道徳教科化による効果と今後の課題

3で述べたように、道徳教科化に位置づけることにより、授業受者である児童生徒達にも道徳教科としての意識付けが高まるものと思われる。つまり、道徳が教科となることで、より厳粛なカリキュラムが求められることとなる。これまでも、全国の学校で心の教育、心に響く道徳教育等と研究が進められてきた。しかし、今日の学校において、不登校、いじめ問題等の諸問題が後を絶たず、道徳性の浸透が成されていない現状がある。こうした諸問題を踏まえ、道徳を教科化することで、児童生徒たちの意識も大きく変わり、教科に対する意欲が向上することが予測される。また、授業を行う教師にとっても、教科となることによって、児童生徒への支援する意識が高まり、これまで以上の道徳に対する工夫改善が期待できる。道徳教科となるため、教科書が扱われることとなるが、他の教科と同様に教科書のみに頼ることはできない。こうした側面からみても教師は専門職として、指導・支援方法の工夫改善による授業の在り方を常に研究していかなければならない。

これまでは、特に指定された教科書はなかったが、地域(区、市、町)によっては、副読本として、扱

われているところが多くある。また、文部科学省の指定する「心のノート」が活用され、道徳授業をサポートする役割を担ってきた。しかし、指導者によっては活用方法が異なり、具体的にどのような場面でどのような活用方法が為されているかは不透明であった。そして、道徳性を深めるための教師の授業力が試されるものであった。さらには、多面的な道徳授業の在り方が方法論として挙げられ、道徳的価値を深める取り組みとして研究が続けられてきた。なかでも、道徳的判断力を培うための方法論として、モラルジレンマ等が挙げられ、授業研究が進められてきた。このように、道徳授業が多面的な視点から、取り組むことができたという良さがある。一方では、道徳教科化により、教科書も導入されることで、教科書活用が必須となる。しかし、以前から教科書については、副読本をはじめ、「心のノート」も活用されてきた。ゆえに、教科書活用の視点からみると、これまでの道徳授業とはあまり変化があるとは予想できない。これまでも授業者は、副読本を活用し、「心のノート」を活用した上で、手法を凝らし、テーマとなる道徳的価値に向かって、思慮深い道徳授業を目指していく傾向にあった。しかし、前述した通り、道徳教科化により、指導者の道徳への指導意識がより一層高まることと、授業工夫改善への取り組みが促進されることは期待できる。何故ならば、教科となることで評価必須となるためである。つまり、評価が地域社会、保護者にもたらすものとして、大きな影響力となり、指導者自分自身の評価にもつながることとなるためである。しかし、ここで大切なことは、指導者の評価のための評価である教科化であっては、道徳としての本来の意味を成さないことを指摘しておきたい。道徳は他の教科に加え、学校教育活動全体としての要であり、全ての教育活動の賜物であるという点にある。つまり、指導者にとって、何のための道徳教育の評価であるのか、崇高な人間としての在り方からの評価が強く望まれる。これは、道徳教科化の本来の目標である「いじめ問題の減少」に向けた取り組みであると共に、児童生徒だけでなく、指導者、保護者、地域社会にとって共に、「心の教育」となることを意味している。すなわち、人としての心の痛みや悲しみ、喜び等の道徳的価値にふれると共に、自らが生活を思慮深く問い正すことにより、自己の生き方を自ら見つめ直し、正しくより善い生き方ができるようになることを期待するものである。



道徳教科化による大きな課題として、教科書を使用することによる授業の形式化を指摘する。つまり、指導者が形式の範囲に捉われてしまい、オリジナリティのある授業が行われにくくなる可能性がある。よって、他教科と同様に教科書のみに捉われることなく、よりオリジナリティに富んだ授業の在り方が必要とされよう。そのためには、これまでと同様の道徳性を深めるための授業研究を行うことは学校教育において絶対不可欠である。道徳性を深めるための研究とは、授業受者である児童生徒たちが、自分自身の姿と真に向き合い、自己省察していく過程で、価値葛藤や自己内対話など様々な思考を経て、深い道徳的思考を行うことができることにある。このことを実現させていくためには、たとえ、道徳教科化となるにせよ、道徳の最大の目標である悟りの境地に向けて、高い道徳性を培えるよう道徳的判断力、道徳的心情を育てていく必要がある。これらを育てていくためには、授業者が道徳教科化による「価値の教え込み」となるとは、児童生徒たちの道徳性が育っているとは言えない。授業者である教師が授業受者である児童生徒達と共に価値を深め、共に考え、判断、感じる（怒り、悲しみ、苦しみ、喜び等の様々な感情）を通じて、はじめて自分自身の生き方を見つめ直し、今後の生活である道徳的実践力として培われていくこととなる。こうした道徳的実践力を培っていくためにも、指導者である教師は、学校教育活動全体としてあらゆる場所にあらゆる機会において、考えることのできる場を設定することが絶対不可欠となる。そして、要である道徳の教科に取り組むにあたり、普段の生活を振り返る場がなければ、自己を問い直すことはできない。学級における道徳性発達のための環境設定、道徳教科化に向けた授業研究と評価方法の在り方について、高い考察をしていく必要があることを指摘しておく。

## V 終わりに

### 1 道徳教科化に伴う今後の学校教育の在り方

まず初めに、道徳教科化に伴い、各学校における学校教育の環境設定について、道徳教育充実のための方策を行うことが必要である。具体的には、

- ① 飼育・栽培等の自然環境
- ② 空間的環境
- ③ 人間関係づくり環境

などが挙げられる。①については、多くの動植物と触れ合うことで、道徳的心情を培うものである。年々

自然が衰退化する今日、児童生徒たちの中には、全く自然と接する機会すらないこともある。ほとんどの学校では、各教科において、自然と親しむことに関連した内容の教育活動があるため、一見、自然と親しむことが十分であると思われがちである。しかし、自らの力で生き物を育てることが不十分であるように思われる。こうした自然を愛する故郷への道徳心は、宮沢賢治が「イーハトーヴの夢」でも述べている。「イーハトーヴ」とはドイツ語をmixした宮沢賢治の造語で、賢治が目指した理想郷である。人道主義と博愛精神に富んだ賢治は、人間はどこに住もうとも、日本のチベットと呼ばれる辺境の地であっても、愛と想像力をもって暮らせば、楽しい暮らしの智慧が湧き、都会では味わえない、自然を楽しむ暮らしと豊かな心のふれあいのある社会を創ることができるのだという夢と希望を与えてくれた。<sup>(7)</sup>つまり、今日の学校教育においても、動植物と真にふれ合うことで、「生きること」の意味を共感することができる。何故ならば、私たち人間もこの地球上で生まれ育ち、今日も他の自然動植物と共に生き続けているからである。

そして、心の奥底から、命の尊さと生きさせていただいていることへの感謝と喜びを感じるようになるのである。今日の便利で発展し続ける社会では、こうした最も生きていく上で大切な道徳心を忘れがちである。あたかも、自分の力でこの社会を生きることができるとの錯覚すら起こしているのではないだろうか。こうした、自然と親しみ、共に生きていくことを心と体で感じ、「生けとし生けるもの」としての人間としての根本的な道徳心を培うことが重要である。そのためには、学校教育活動の環境づくりの工夫、体験活動を重視した授業方法の工夫改善は絶対不可欠である。環境づくりで私が特に取り入れるべきと考えているのが、「ビオトープ」である。このような、常に自然の動植物と触れ合う機会をつくることで、生きることを共感できる第一歩を踏み出すこととなる。ゆえに、より一層のこれからの自然環境整備の工夫が必要である。

②での空間的環境においては、学校のあらゆる空間における環境設定の重視である。具体的には、児童生徒、地域保護者が目にする教室の掲示物、美化清掃等が挙げられる。どの学校においても全力で取り組まれているものと思われる。しかし、学校によっては、教師自らが美化に取り組み、児童生徒たち自らの力で美化に取り組む姿はみられないことが

ある。これは、児童生徒たちの心の中に、「何故、学校を美しくする必要があるのか」についての意味理解と道徳性が深まっていないため起きている現象である。「学校で学ばせて頂いている」「こうした校舎を作っていただいた人々への感謝の念」等が欠けていることが問題であると考えられる。逆に児童生徒達の心の表れが、校舎の空間として大きく現れる。つまり、空間的環境をつくる大きな要因となるのは、普段での児童生徒たちの心の成長の姿と言えよう。よって、教師は普段からの児童生徒たちの心を如何に育てていくかによる。こうした意味でも、特に「感謝の念」については、常日頃の教師の教育活動において重要視されるものである。また、掲示物等の学習環境が目映る意味でも他の児童生徒たちに大きな影響力を及ぼすこととなる。そうした意味でも、掲示物、空間づくりは大きな意味を成す。

③での人間関係づくり環境においては、学級内でのコミュニケーションをはじめとする人間関係づくりの形態（席等の工夫）、異年齢でのコミュニケーションの機会の提供、地域の人々との関係づくり、幼保育園児とのコミュニケーション等、様々な人々とのコミュニケーションを行うことで、同年齢では培えることのできなかった価値を共有することができる。そして、道徳的価値を深め、拡張したものへとつながる。<sup>(8)</sup>こうした、コミュニケーションを行う機会を提供することは、学校教育活動を行う上で大切な道徳性を高める環境づくりと言える。

以上に挙げた主な環境づくりを行うことにより、道徳教科化が有意義な効果をもたらすことへとつながる。そして、道徳としての教科の成す本来の意味である「より善く生きること」に気づくことが可能となるであろう。あくまでも、学校教育活動全てが基礎となり、特設道徳の教科が要となる。すなわち、総合単元的な道徳授業カリキュラムを参照にし、各教科、各々との教育領域との関連付けを綿密に行い、教科「道徳」として変わることにより、以前よりもさらに道徳性の向上を果たすことが期待される。そうした意味では、全ての教育活動が道徳教科の領域と言っても過言ではない。

## 2 道徳教科化に伴う教師教育と今後の道徳に関する考え方

これまでに論述した通り、道徳教科化に関わる教師の役割と責務は、重要かつ社会への大きな影響を及ぼすこととなる。さらに、最も重要な視点として、

道徳を単なる評価として取り組む危険性が考えられる。これらを改善していくためには、各担任である教師が児童の実態等を明確に踏まえた上で、各々の児童生徒たちにとってどのような道徳性が必要であり、どのようなカリキュラムを検討していく必要があるかが大切である。あくまでも、教師自らの評価に陥らないことが重要である。また、こうした評価については、児童生徒たちを通じて、保護者や地域社会に大きな影響を及ぼすこととなる。そして、道徳は教育活動全てにおいて考えていかなければならない教科として念頭に入れておく必要がある。総合単元的な道徳カリキュラムを例に示して述べたように、各教科との関連性を踏まえ、今までの児童生徒たち自身の姿を自らが見つめ直し、新たな道徳的実践力へと生かされていかななくてはならない。

なお、いじめ問題や深刻な諸問題が頻繁に起き続ける今日、教師たちは真に心を改善され得る道徳の在り方について考え、実践する必要がある。また、(1)①に示した環境づくりにもあるように、生きていることの素晴らしさを知り、自分たちが大自然の恵みと祖先たちによって、今日を生かさせて頂いていることに気づき、日々感謝することへの大切さに悟ることを最大の目標としなければならないと考える。そのために、教師たちは日々の授業研究は勿論、児童生徒たちの道徳性発達を分析理解しておかなければならない。しかし、ここで留意したいのは、道徳教科化となるにあたり、教師による価値の教え込みとなることである。このような事態に陥ってしまうと、教師が授業で発言した言葉により、児童生徒たちは教師の道徳的価値を正しいと思うのである。ここで大切な点は、授業受者である児童生徒たちが自他の姿を十分に理解し、善悪の判断と崇高な心情を培うことができるかにある。それは、教師や社会の大人たち万民に対しても必要なことである。つまり、これからの教師にとって、児童生徒たちの自律と、自ら正しい判断と心情をえがくことのできる人間育成を行うことへの教育が重要である。

以上の点をふまえ、学校教育としての目標が十分に遂行されるよう、学校長、教頭をはじめ、教育委員会等の教育関連機関は、充実した真の道徳教育のために教師教育の在り方を十分に高めていかななくてはならない。今後の、教育関係者が一丸となって取り組み、真の道徳性を培える教科化を期待する。

## 参考文献

- 1) 村田昇 (編)『これからの道德教育』東信堂 1997
- 2) 荒木紀幸 (編)『モラルジレンマ資料と授業展開 小学校編 第2集』明治図書1990
- 3) 松下良平『道德の伝達—モダンとポストモダンを超えて』日本図書センター
- 4) 押谷由夫『総合単元的道德学習論の提唱—構想と展開』文溪堂 1995
- 5) 森川直『新世紀 道德教育の創造 第4章 自立する力を育む道德教育』東信堂 2002
- 6) 渡邊満, 盛美賀『「生きる力」をはぐくむ道德学習の研究: 子どもたちの話し合い活動による総合単元的な道德学習をめざして』兵庫教育大学学校教育学研究 12, pp.53-64,2000
- URL:[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/096/shiryo/attach/1340545.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/096/shiryo/attach/1340545.htm)
- (3) 大森史博『道德性の発達と問いかけの可能性』岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要 14, pp.269-279,2015
- (4) 作田澄泰『道德的実践力を育てるカリキュラム開発研究—総合単元的な道德学習へのアプローチ』岡山大学大学院教育学研究科 2008
- (5) 作田澄泰『自己の生き方を問う道德教育のあり方—道德授業を通じて生きる実践力を育てる』大学教育出版 2011
- (6) 島恒夫『道德の時間の評価の在り方と工夫』奈良県立教育研究所 研究紀要 13, p.2, 2006
- (7) ユートピア研究 宮沢賢治のイーハトーブ—ドリームランドとしての岩手県  
URL:<http://www.geocities.ws/genitolat/Utopia/012.htm>
- (8) 住野好久, 作田澄泰『道德性を拡張する道德授業構成に関する実践研究: コミュニケーション的行動論をふまえて』岡山大学大学院教育学研究科研究集録 149,pp.1-8,2012

## 引用文献・注

- (1) 文部科学省ホームページ  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/chousa01/shidou/1267646.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/shidou/1267646.htm)
- (2) 文部科学省ホームページ資料2-1 道德教育充実のための改善策について—新たな枠組みによる教科化を中心に—

---

Consideration about the State of Future's New Teacher Education and Scholastic One for Morality Subject-ization  
—Inspection of the True Moral Education Considered from an Overall Unit-like Morality Class Curriculum—

Kiyohiro SAKUDA<sup>\*1</sup>, Yoshikazu NAKAYAMA<sup>\*2</sup>

(Abstract)

This is to consider that the reason why they need moral education in today's school. The ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology puts morality subject-ization into effect. Now they are trying to strengthen "the whole scholastic campaign" based on the overall unit-like morality class curriculum that has put into effect.

In this study we analyzed the effect by morality subject-ization and the problem in the evaluation method of morality subject-ization using adiagram based on our insistence. As a result we proved that morality subject-ization will make it easy to raise the moral value consciousness by emphasizing the consciousness to morality. I made it clear about the importance of the naturalness and the space human environment making and the state of the teacher education for moral education of the purpose through which I "live well" in the school ducation.

Keywords: Evaluation method of morality, the effect by morality subject-ization, scholastic environment configuration, overall unit-like morality class curriculum

---

※1 Waseda University institute of teacher education

※2 Okayama University career development center

---